

# ハワイにおけるピジン語の歴史的背景と英語教育への影響

## The History of Hawaii's Marginal Languages and Pidgin in Classroom Settings

白井 友季子

Yukiko Shirai

大阪学院大学

Osaka Gakuin University

**Abstract:** The purpose of this paper is to explore the historical background of the marginal language in Hawaii and discuss the potential benefits of using said languages in classroom setting as a means to promote learners' English literacy skills. Developed during an immigration boom which saw a large number of Chinese, Portuguese, and Japanese immigrants come to Hawaii to serve as laborers on sugarcane plantations, Hawaiian Pidgin English (HPE) emerged as a marginal language that could be used to overcome communication barriers amongst the immigrant workers who lacked a common language. As the number of HPE speakers increased, a new form of Pidgin language, Hawaiian Creole English (HCE), also emerged in Hawaii. Today, both HPE and HCE are commonly referred to as simply, Pidgin. While many may view Pidgin as a dialect or broken language, various underlying cultural practices and linguistic influences have shaped the development of the language over time. This paper begins by reviewing the historical background of the native Hawaiian population and economic development in Hawaii before shifting its focus towards the history of immigrant labor in Hawaii. The paper then discusses reasons why Pidgin is more than simply a broken language and concludes with a discussion on the benefits of using Pidgin in classroom settings with recommendations for those teaching English in areas where the marginal language is actively used in everyday settings.

**Key words:** Hawaiian Pidgin English, Hawaiian Creole English, language education, dialects, marginal languages

### はじめに

本稿はハワイの歴史と文化、とりわけハワイへプランテーションの労働者として移民したエスニック集団の歴史を辿る中で、移民者の「アイデンティティー」とは何かを考えたい。さらに、ハワイの接触言語と英語教育の関わりを考察することを目的とする。ハワイの接触言語には、ハワイアン・ピジン語が存在する。この接触言語は、サトウキビ農園が発展していく中で、

共通の言語を持たない中国、日本、ポルトガルなどの移民者が、生活に最低限必要なコミュニケーションを取り合うために生まれた言語である。さらに、ハワイアン・ピジン語がより多くのハワイ住民に浸透し、言語のクレオール化が進み、ハワイアン・クレオール語の発展へと繋がっていく。ハワイの接触言語は、現在でもハワイで育った地元人（ローカル）がコミュニケーションをとる共通言語として用いられており、「ピジン語」と呼ばれる言語として使われている。

しかし、ピジン語にはさまざまな見解があり、アメリカ本土の英語と比べて、異なる点が数多くあるため、「英語の方言」あるいは、「ブローケン英語」だとして位置づけられることが多い。その一方で、ピジン語には、移民文化の長い歴史と多様な文化が混ざり合って形成されたひとつの「言語」であるという見解もある。

実は近年、ハワイのピジン語がかかえる大きな問題がある。それは、ピジン語が英語教育に悪い影響を及ぼす可能性があるという現在の状況である。その状況に通暁するためにも、ネイティブ・ハワイアンの歴史とハワイの経済の発展を考察し、さらには、ハワイの移民史をたどりながら、ピジン語の形成過程の考察を通して、なにゆえピジン語を一つの「言語」として定義づけるのかを明らかにする。加えて、ピジン語と英語教育の関わりを考察するのが本稿の目的である。

## 1. ネイティブハワイアンの歴史とハワイ経済の発展

8つの島から成り立っているハワイは、アメリカ合衆国の50番目の州であり、さまざまなエスニック集団が集まっている州である。それを象徴するかのように、地元人（ローカル）と話す際、一言目に聞かれる言葉は決まっていて、「Who yu? Where yu from?」（和訳：あなたは誰ですか？どこから来たのですか？）なのだ。ハワイで育った、ローカルの間では、相手のアイデンティティーを確かめることによって、ローカルであるのかどうかを知って安心しようとする習慣がある。このようなローカル特有のアイデンティティーを大切に理由を、ハワイの歴史を辿る中で考察することにする。

矢口（2019: 17）によると、1778年にジェームズ・クック（James Cook, 1728-1779）がイギリスからハワイに來航したことが、ハワイと移民を繋ぐ大きなきっかけになったと述べている。ジェームズ・クックがハワイに來島した際、ネイティブ・ハワイアンは約20万から100万人住んでいたと記されている（Sakoda and Siegel 2003: 3）。ジェームズ・クックの來航により、ハワイの島々には貿易を目的としてアメリカ、さらにはヨーロッパからの船が次々と訪れるようになった。その結果、たくさんの貿易船が中間地点として、ハワイに來航するように

なった。Sakoda and Siegel (2003: 3) には、1790年から1810年の間に中国に向かう欧米の貿易船がハワイに来航し、その後、ハワイでは白檀 (sandalwood) と呼ばれる木の貿易や、捕鯨産業が盛んとなり、ハワイを訪れる人の数が多くなったと述べている。これらの産業はハワイ経済に大きな影響を与えた。白檀は中国で仏像や扇を作る際に必要な材料として使われていたため、ハワイの白檀を使って、中国との貿易を発展させたのである。その後、白檀の摂取が困難となったが、次いでハワイ経済を救ったのが、捕鯨業であった (山本・山田 2017: 80)。アメリカや、ヨーロッパでは鯨油はランプ用の油、鯨骨は歯ブラシなどの日常生活には欠かせない貴重な資源であった。矢口 (2019: 17-18) は、この捕鯨産業が、ハワイを代表する一大産業に発展させた出来事だと指摘している。

その一方で、ハワイ経済の発展にともない外部からの人口が増加することにより、それまで存在していなかった病が流行り、ネイティブ・ハワイアの人口が急激に減ったのも事実である。山本・山田 (2017: 68) によれば、ハワイ諸島に多数の商人が訪れハワイ経済を成長させたが、はしか、百日咳、結核、水疱瘡、インフルエンザといった新しい病が出現し、ネイティブ・ハワイアンを脅威に晒したことを明らかにしている。その結果、1848年には、約20万から100万人のネイティブ・ハワイアの人口が約8万8千人まで減少した (Sakoda and Siegel 2003: 3)。

矢口 (2019) は、ネイティブ・ハワイアの人口が減少していくと、これまで発言力をもっていたネイティブ・ハワイアの力が次第に弱まり、その結果、白人がハワイ経済の権力を握ることに繋がっていった、と指摘している。

ネイティブ・ハワイアの発言力がハワイ王朝の中で衰退していく中、サトウキビ産業の発展が白人の立場をより明確にした。もともとハワイにあるサトウキビ農園は、ネイティブ・アメリカンの食料としてのみ栽培されていたが、輸出を目的としては栽培していなかった。

1835年、カウアイ島で本格的なサトウキビ農業が開始された。1850年以降にはハワイでの外国人の土地の私有が認められ、白人たちがハワイの各島にサトウキビ農園を開拓し始めた。

1861年にはハワイでのサトウキビの生産量が急激に増加したと記録されている。その理由として矢口 (2019) は、南北戦争中に、砂糖を供給するために大規模なサトウキビ農園がハワイの島々で開拓されたと述べている。その後、ハワイはサトウキビ農園の島と呼ばれるようになったのである。

サトウキビ産業はハワイ経済の大半を占め、白人に大きな利益をもたらすようになった。こうして富を得た一部の白人はサトウキビ農園以外の運輸、保険、銀行などの企業も経営し、ハワイ経済における絶対的存在となった。矢口 (2019: 21) によると、この出来事が「ビッグ・ファイブ」と呼ばれるきっかけとなったのである。

ハワイ経済とサトウキビ農業が発展していく過程で、ネイティブ・ハワイア人がプランター

ションの労働者として移民してきたエスニック集団、さらに商人や捕鯨関係などの来島者たちとの交流によることが、ハワイの接触言語の形成に大きな影響を与えたと考えられている。

Sakoda and Siegel (2003: 4) には、商人と捕鯨船がハワイを訪れる際、来島者がネイティブ・ハワイアンと会話をするために、ハワイアンの言語を学び、また、ネイティブ・ハワイアンも英語の言語を学び始めたとある。数多くの語彙は現在でも、ハワイの接触言語に使われていると述べた上で、1840年に発行された小説、*Two Years Before the Mast*の中から、次のような例をあげている。

(例)	Now	<u>got</u>	<u>plenty</u>	money;	no	good	work.	Manule
		have	a lot of					later
	money	<u>pau</u>	-all	gone.	Ah!	very	good	work!
		finished						
	-makai	hana	hana	nui!	...Aye!	me	know	that.
	good	work	work	a lot		I		
	By-'em-by		money	<u>pau</u>	-all	gone;	then	Kanaka
	will			finished				Hawaiian
	work	<u>plenty</u>	...Aole!	me	no	eat	Captain	Cook!
		a lot of		I	not			

Sakoda and Siegel (2003, 4)

上に挙げた例の会話では、“plenty”を用いて、「多い」を意味している。“got or get”は「持っている」という意味で借用されている。これらの語彙は現在でも、ローカル同士の会話の中で用いられている。同じように、ハワイアン語の“hana”「仕事」と、“pau”「終了した」もローカル同士の会話で用いられている。その中でも、“pau”「終了した」は現在のハワイでもよく用いられる動詞として存在している。

## 2. ハワイとサトウキビ・プランテーション労働者の歴史

ハワイのサトウキビ農業が発展していく中で、「移民者」の言葉が知られたきっかけを移民史と照らし合わせながら考察していきたい。サトウキビ農業が始まったころは、ネイティブ・ハワイアンが労働者としてサトウキビ農園で働いていた。矢口 (2019: 22) は、ネイティブ・ハワイアンは自らの食料のための栽培は必要だと考えるが、お金を稼ぐための栽培には否定的

な考えを持っている伝統的民族であったと指摘している。サトウキビ農園での労働は重労働の厳しい労働だったのに加え、ネイティブ・ハワイアの人口が急激に減少したことが原因となって、労働者の人数がサトウキビの栽培に足りなくなったのである。この現状を緩和する目的として、ハワイで移民者を募ることとなったのである。

最初のサトウキビ農園の労働者として、約2000人の中国人がハワイに移民者として来島した(矢口: 24, Sakoda and Siegel 2003: 4)。当時のハワイでは、サトウキビ農園での労働者不足が一番の問題であり、中でも、長続きのする移民労働者が少なく、ハワイのサトウキビ産業で大きな問題となった。

1868年には、日本から149名の移民者がハワイに来島した。当時は、これらの移民者を「元年者」と呼び、白人たちは大きな期待を胸に彼らを受け入れた。しかし、彼らが農作業に不慣れだった上に、労働条件での合意が得られずサトウキビ農園を去ったのである。

1885年以降は、ハワイ政府と日本政府が協力し、日本から大勢の日本人がサトウキビ農園の労働者としてハワイへ移民した。彼らは、「民約移民」と呼ばれている。その後、様々な移民制度が改正、廃止され、「自由移民」の時代へと移った。矢口(2019: 26)によると、1902年にはサトウキビ農園の日本人労働者の数が70%に達していたと述べている。さらに、Sakoda and Siegel(2003: 5)は、1924年までに約20万人以上の日本人がサトウキビ農園の労働者としてハワイに移民したと指摘している。

移住者はすべてサトウキビ農園の労働者とはかぎらず、ハワイに日本の食文化、生活習慣など、さまざまな文化を持ち込んだ日本人の存在もあったと述べている。筆者の母の叔母も、日本文化の普及をハワイで貢献した人物の一人である。

『ハワイ日系パイオニアズ-100の物語』<sup>1)</sup>に、ハワイで日本文化の普及に貢献した一人の日系パイオニアズとして、筆者の母の叔母(花柳三津秋 本名・ヴァウオレット細川いきえ)が選ばれた。1947年、花柳舞踊専門学校の校長として、日本舞踊や三味線などの伝統芸能の継承に貢献した功績が認められ、日系パイオニアズとして選ばれたのである。著者ポール円福は、その著のなかで、そのルーツには両親が関係していたと述べている。

筆者の母の叔母の父親(細川善次郎)は、香川県出身で、連鎖劇<sup>2)</sup>の座長であった。細川善次郎は、当時ハワイにあった新派劇団「大正会」の招待でハワイを訪れることになる。1923年には、連鎖劇をハワイではじめて公演したとされている。

1932年からは、ハワイ大学で日本演劇部の指導者として日本文化を広め、「忠臣蔵」・「出家とその弟子」・「弥次喜多道中記」などの演目の公演を行った。1964年には、この功績が評価され大学から金メダルが贈られたと記録が残っている。

さらに、1964年11月には「演劇の公演及び日本舞踊の指導育成に尽力し、日本舞踊を通じて日米国民の融和、理解の増進に寄与した」として藍綬褒章を受章した。

その後、細川善次郎はみつえ（祖母の母親）<sup>3)</sup>と結婚し、ハワイ州のみならず、アメリカ本土へも日本の舞踊を伝えた。その活動が評価され、1973年秋の叙勲で「舞踊を通じ日本文化の紹介に努めた」として勲六等瑞宝章を受章した。

筆者の母の叔母（花柳三津秋）は1915年10月にホノルルで日系2世として生まれ、幼い頃から芸能一家に育ち、6歳で初舞台を踏んだとされている。各島のサトウキビ農園やアメリカ本土で公演をし、日本の文化や日本舞踊を伝えたのである。

1950年には、正式な学校として花柳舞踊学校が認可された。ハワイで唯一開校された舞踊学校として、多くの2世、3世の生徒が集まる施設が誕生することとなった。さらに、日本国外で唯一の花柳流舞踊の学校であったとされている。花柳舞踊学校は、日本文化を伝えるためアロハウイークや桜まつりなどの行事、総領事館のパーティー、連協やホノルル日商工のイベント、出雲大社、ハワイ大神宮、金刀比羅神社、日蓮宗別院、パロロ観音寺などの神社や寺院の催しで日本舞踊を披露した。数多くのリサイタルを開催してきたが、日本文化を普及する目的のために、入場料は無料で行っていたのである。この活動の目的は、ハワイでの日本文化の存続のためであり、現在も多くの支持者から支えられながら継続している。

花柳舞踊学校では、日本の舞踊を伝えるだけでなく、礼儀作法にも厳しかったとされている。花柳三津秋によると、「特に小さい子には、踊りを通して日常のしつけも教えたい」という願いがあったと語っている。

1968年に、日本政府より、「ハワイの発展と日系人社会の向上、繁栄のため顕著な功績を挙げた」として表彰された。花柳三津秋は、舞踊の技術を伝えるだけでなく、礼儀作法といったさまざまな日本文化を伝えていく中で、ハワイにおける日系社会に貢献したのではないかと筆者は考える。

### 3. 多文化社会におけるピジン語の影響

ハワイでは、サトウキビ農業の発展とプランテーションにおける雇用人数が増加する中で、新たな言語の形成の発展へと繋がったと言われている。白水（2015: 40）によると、プランテーション内の居住地域は「キャンプ」と呼ばれ、人種別に区画されており、それぞれの区画には名前が設けられていたと述べている。

- (例) 「アー・フォン Ah Fong」 中国系の居住区  
「ナシワ Nashiwa」 日系の居住区  
「コッドフィッシュ Codfish」 ポルトガル系の居住区 白水(2015: 40)

地区割りをされていた理由として、新天地でも故郷の文化や、生活習慣を保持する狙いがあった。この地区割りが、多文化社会と呼ばれるきっかけに繋がっていると考えられている。

山本・山田（2017: 98）によると、キャンプ内で母国の生活習慣を保持する中で、異なるエスニック集団との交流もあったと述べている。同じように白水（2015）も、移民者同士が、昼食を分け合う中で、異文化の交流が行われていたと指摘している。さらに食文化だけでなく、暮らしの習慣も共有していたと述べた上で、次のような例を挙げている。日本からの移民者が使っていた公衆浴場に、他の国からの移民者も使うようになったと述べている。キャンプ内での文化交流の状況が、この例からも明らかになっている。これら交流が、現在のハワイの多文化社会と呼ばれるきっかけになったと考えられる。

ハワイでプランテーションの労働者として働く中で、彼らには大きな問題が一つあった。それは、移民者同士が交流していく中で、「言語」が最大の壁であった。しかし、労働者であった彼らには、ハワイの共通言語である英語を習得していく状況や環境にはなかった。このような状況下で発生した言語を「接触言語」と呼んでいる。マーク・セバ（2013）によると、接触言語とは、簡略化された文法と語彙を使い、必要最小限のコミュニケーションを取り合うために発生した言語のことであると定義している。

ハワイへ移民したサトウキビ農園の労働者は、新しい言語を学ぶために仕事を休んで、学校に行ける環境にはなかった。彼らはまったく言葉が分からないにもかかわらず、即戦力としてハワイに来島するや、すぐさまサトウキビ・プランテーションに入れられるという過酷な状況にあった。彼らにはゆっくりと新しい言語だけを習得していく状況や環境はなかった。そのためには「接触言語」のような、文法が単純で少ない語彙を用い、より少ない労力でしかも学びやすい言語を習得しなければならなかった。

ハワイには2種類の接触言語が存在する。ハワイアン・ピジン語とハワイアン・クレオール語である。現在のハワイでは、「ピジン語」としてローカル同士の日常の言語が用いられている。

ハワイにおけるピジン語は、さまざまなエスニック集団の多様な文化が混ざり合って形成された言語である。例えば、日本語の語彙とピジン語の関わりを考察した際、さまざまな日本語の語彙がピジン語に影響を与えたと指摘されている<sup>4)</sup>。暑さを伝えるために、日本語の「Atsui」を借用されることが多く、さらに、「Daikonlegs」など、日本語の単語と英語の単語が混ざりあった語彙も存在する。この語彙は、人の足の色、長さ、太さを表現する際に用いられる（白井 2020）。

さらにSakoda and Siegel（2003: 11）によると、中国人や、ポルトガル人とハワイ先住民（ハワイアン）の母語の特徴がピジン語の基礎の文法や文の構造に反映されていると述べた上で、次の例を挙げている。

(例 1)	ハワイアン語	Nui	ka	Hale
		Big	the	house
	ピジン語	Big,	da	house
		Big	the	house

「この家は大きいです」

(例 2)	ピジン語	Cute,	da	baby
		Cute	the	baby is

「この赤ちゃんは可愛いです」 Sakoda and Siegel (2003, 11)

例1で用いられている、「この家は大きいです」を英語では、“The house is big”と表現する。英語では、主語+動詞+補語が基礎の構文である。一方で、ハワイアン語では、“Nui ka hale”と表現する。同じようにピジン語も、「この家は大きいです」を、“Big, da house”と表現する。ピジン語では、主語+補語の構文を用いられる傾向がある。

さらにSakoda and Siegel (2003: 11)によると、感激などを表現する際に使う、感嘆文もハワイアンの母語の特徴が反映されていると述べた上で、次のような例を挙げている。

(例 3)	ハワイアン語	Auwe,	ka	nani!
		Oh,	the	pretty
	ピジン語	Oh,	da	pretty
		Oh,	the	pretty

「なんて可愛らしい」 Sakoda and Siegel (2003, 11)

感嘆文では、「What」と「How」が使われることが多いが、ピジン語では、「da (the)」を使って、感嘆文を表現されることが多い。

ピジン語の文の構造には、ハワイアン語からの借用だけでなく広東語とポルトガル語も大きく影響していた。Sakoda and Tamura (2008: 41)によると、ハワイのプランテーションへ初めて来島したのが中国とポルトガルからの移民者であったため、彼らの母語の特徴もピジン語に大きく反映されたと指摘している。

例えば、広東語で“yauh”とは“have/has”と“there is/are”の両方の意味をもつ。Sakoda and Siegel (2003: 12)は、この“yauh”の構文がピジン語に影響を与えたとして、次のような例を挙げている。



- (例 1)            英語            They            have            three            sons.  
                     ピジン語        They            get            three            sons.  
                     「彼らは3人の息子がいる」

- (例 2)            英語            There is        a student      who's            very bright,  
                     ピジン語        Get              one student    he                very bright.  
                     「あそこにとっても明るい学生がいる」

例1と例2のピジン語で使われている“get”は英語で用いられる際、動詞として使われる。しかし、ピジン語では、“get”を“have/has”と“there is/are”の意味として用いられている。

次に、ポルトガル語からの影響として下記の例文を挙げている。ポルトガル語の“para”は、英語の前置詞を意味するが、ポルトガル語では、“para”を動詞の前に使われる傾向がある。Sakoda and Siegel (2003: 12)によると、ポルトガル語の“para”の構文がピジン語に影響されていると述べた上で、次のような例えをあげている。

- (例)              英語            Charles        is            the man      to            do            it.  
                     ピジン語        Charles        is            da man      fo (for)    do            it.  
                     「チャールズがすべきだと思う」

例文のピジン語で使われている“fo (for)”は英語で用いられる際、前置詞として使われる。しかし、ピジン語では、“fo (for)”を動詞に前置する傾向がある。ピジン語の文の構造には、広東語や、ポルトガル語とハワイアン語の特徴が反映していることが、これらの例からも明らかになった。さらに、Sakoda and Siegel (2003: 14)によると、日本語の特徴がピジン語のdiscourse marker (談話標識) に影響しているとして、次のような例を挙げている。

- (例 1)            Wi              go              finish,        no?  
                     We're        going to        finish        aren't we?  
                     「彼らは3人の息子がいる」



#### 4. ハワイにおけるピジン語と英語教育の関わり

ピジン語は、ローカルの第一言語であり、ローカルコミュニティの団結の象徴でもある。その一方で、ピジン語はプランテーションの労働者によって独自に作り上げられた言語として、他の言語よりも地位が低くみられることがある。また1849年から1896年の間に、ハワイの公立小学校では英語のみの言語教育をおこなうように規制されたことで、ピジン語への偏見も一層強くなっていった。

1924年、英語のみの言語教育をおこなう学校が設立され、多くの白人学生が在学していた。Romaine (1994) によると、ローカルは英語の学力テストで不合格となり、同様の教育を受けられないことが多かったと述べている。その理由として、白人とローカルとの距離を離し、ピジン語離れを起こすことが狙いだったと指摘されている (Romaine 1994: 531)。

一方、ハワイ州の教育委員会では、ハワイにおける英語教育の弱体化の原因をピジン語だと断言し、学校では英語のみの言語教育をおこなうように規制した。これらの活動がきっかけとなって、ローカルの間では逆にピジン語への関心が高まり、ローカルコミュニティの団結を一層強めたのである。一方ではまた、ピジン語への偏見が強くなるきっかけともなったのである。

1962年2月13日にHonolulu Star-Bulletin新聞社から発行された新聞の見出しに、動物が話すという言葉とピジン語を比べる記事が掲載されたことがあった (Siegel 2005: 145-146)。近年では、さすがにこのような過激な偏見は見られなくなっているが、ハワイの接触言語に対して、このようなネガティブな印象が存在していることを忘れてはならないだろう。

1999年10月12日にHonolulu Star-Bulletin新聞社から発行された新聞の見出しには、「ピジン語はブロークンな英語だ。壊れている物を直すように、ピジン語も直さなければいけない」とある。

これらの見出しからも明らかなように、ピジン語を英語教育の観点からみた際、低く位置づけられることが多く、英語教育の弱体化の原因だとされてきた。

1999年代、当時ハワイ州の教育委員会の委員長であった、Mitsugi Nakashimaによると、「ローカルが英語の文章を書く際、ピジン語で考えながら文章を書くため、正しい英語で文章を書けないのである。その結果、アメリカ合衆国のライティングの共通テストで良い成績が残せない」と述べている。Da Pidgin Coup (1999: 30) によると、英語のライティングスキルを学ぶことは大切なことだと指摘した上で、ピジン語が学習者の英語のライティングスキルに直接影響している有無は明らかではないと述べている。

Siegel (2005: 152-153) は、学習者の第一言語であるピジン語を用いて、英語の読み書きの能力を教えているさまざまな教育機関を紹介している。例えば、セーシェル・クレオール語を

話す、セーシユルの初等教育や、トク・ピジンクレオール語を話す、パプアニューギニアの保育園。そして、ハイチ・クレオール語を話す、ハイチ共和国からの移民者向けに英語を教えているニューヨークの語学学校。これらの学校からの評価によると、先にピジン語・クレオール語を用いて、読み書きの能力を学んだとしても、英語の学習能力へは影響は確認されなかったと述べている。

さらにSiegel (2005) は、ピジン語と英語の読み書きの能力の関係性を考察している。それによると、まず、ピジン語が第一言語である学習者を2つのグループに分けたのである。グループ1は、読み書きの能力をピジン語で学んだ学習者。グループ2は、読み書きの能力を英語で習得した学習者。その結果、最初にピジン語で読み書きの能力を学んだグループの方が、英語の読み書きのスキルが高い結果となったことが判明した。

Da Pidgin Coup (1999: 34)・Siegel (2005: 154) は、学校でピジン語を禁止することによって、学習者にさまざまな影響を与える、と述べている。例えば、ピジン語が「二流英語」や「正しくない英語」などの印象を強めることで、学習者は間違った英語を話したくないという不安から、積極的な授業の参加をやめてしまうことがある。その結果、学習者には大切なスキルである、「考えを言葉で述べるスキル」の習得にマイナスの効果を与えると指摘している。さらに、学習者の学校での生活態度にも影響を及ぼすことがある。ピジン語が「二流英語」などの印象を植え付けることによって、言語に対してネガティブな思考となる。それがきっかけとなって、学校生活での行動にマイナスの効果を及ぼすと指摘している。筆者は、ピジン語を英語教育で禁止するのではなく、お互いの言語を尊重することで学習者の英語習得により影響を与えようとする。同じように、Romaineは、その研究のなかで、“When you acknowledge a language, you acknowledge a people” 「言語を評価することは、その言語を話す人びとを評価することである」、と述べている。

Wigglesworth and Billington (2013: 241) は、オーストラリア・クレオール語を母語とする学習者を考察する中で、言語の「気づき」の大切さを指摘している。オーストラリア・クレオール語を話す学習者が、オーストラリアの全国テストを受ける際に、文法の選択問題で間違いやすい設問として、次のような例を挙げている。文法の選択問題で、オーストラリア・クレオール語の文法では正解であるが、英語では不正解の設問がテストにでると説明している。学習者はその設問が不正解とは気づかず、正解として選ぶ傾向があると挙げている。Wigglesworth & Billington (2013) は、オーストラリア・クレオール語と英語の違いを学習者に教える機会を与えることができれば、このような間違いは避けられると述べている。さらに、言語の違いを認識することで、教師がテストを作成する際に、曖昧な設問を出題することが避けられると指摘している。

上で述べたとおり、ハワイ州の教育委員会では、ハワイにおける英語教育の弱体化や、ライ

ティングテストの成績低下の原因はピジン語だとしている。学習者にとって、ライティングスキルの習得は簡単ではなく、繰り返しの練習が必要である。また、英語とピジン語を別の言語として伝える中で、英語の習得へと繋がるを考える。Da Pidgin Coup (1999)・Siegel (2005)によると、英語を学ぶ中で、ピジン語を禁止するよりもピジン語を用いながら英語を学ぶと、読み書きの能力へよい影響を与えると指摘している。Siegel (2005) は一つの解決方法として、“awareness approach” を挙げている。

Siegel (2005: 155) によると、“awareness approach” とは、ピジン語を禁止にしないことを前提にした上で、英語の習得に悪い影響を与えず、学習者の能力を高められる方法として使われている。この“awareness approach”には、“socio-linguistic component (社会言語学)”と“contrastive component (対照言語学)”の2つの要素が含まれている。英語の歴史や、言語史を社会言語学の観点から学ぶことで、学習者は英語が標準言語として用いられるようになった理由を学ぶことができる。さらに、ピジン語について社会言語学の観点から学ぶことで、ピジン語は英語と異なる言語の一種であることを明確にする意図がある。また、どちらの言語が良い、あるいは悪い言語という偏見を取り除く機会をつくるためでもある。

さらに、ピジン語と英語の基本の文法や、文の構文を、対照言語学の観点から比較することで、ピジン語の言語構成や言語の違いに気づくことができる。Wigglesworth and Billington (2013: 241) には、言語の違いを認識することは、英語を習得する上で非常に大切なことだと指摘している。加えて、Da Pidgin Coup (1999: 38) は、言語の違いに気づくことで、言語への理解が深まると述べている。また、この“awareness approach”を用いたセミナーを開催することによって、言語の習得を促進できると述べている。例えば、ピジン語、英語の歴史や文化、言語学を学ぶことによって、言語の多様性についての理解を深めることができる。また、日常生活において、ピジン語を用いる機会を増やすことによって、言語に対する偏見がなくなる。その結果、言語に対しての必要性が高められるのである。そうしたことから、学校でのピジン語の使用を規制するのではなく、言語に対しての気づきを与える機会をつくることで、言語の習得の助けへと繋がることを筆者は考える。

## おわりに

ハワイにおけるピジン語とは、ハワイの多民族社会やハイブリットな文化、複合文化社会を象徴する言語である。Da Pidgin Coup (1999) がローカルにピジン語の印象を問いかけた際に、次のような答えがかえってきた。

When I speak Standard English I gotta tink what I going say ... Pidgin, I jus' open my mout' and

da ting come out.

「英語で話す時は、考えながら話さないといけないが、ピジン語は何も考えずに思ったままに話すことができる」

彼らにとって、ピジン語とは彼らの一部であり、ローカルのコミュニティーを象徴とする必要な言語である。その一方で、これらのピジン語に対して、さまざまな見解がある。例えば、英語教育の低下はピジン語が原因だとされている。

ハワイにおけるピジン語と英語教育の関わりを考察していく中で、ピジン語に対する理解を示すことで、英語の習得に影響することが明らかになった。Da Pidgin Coup (1999: 37) には、言語教育をおこなう中で、接触言語を規制するのではなく、言語に対する理解と習得の助けになり得る方法を模索することが大切であると指摘している。筆者は、言語に対する理解を示すことで、学習者からの信頼が得られると考える。さらに、この“awareness approach”が、ハワイにおける英語教育の促進に役立つと考える。

この方法は筆者自身<sup>5)</sup>がハワイ大学マノア校に在学中に、ピジン・クレオール語の授業を履修した際に経験したことがある。担当していた教授は、ピジン・クレオール語の研究でも有名なKent Sakoda教授であった。講義の中では、ネイティブハワイアンやハワイにおける移民者の歴史、文化について学び、ピジン語の形成過程などを学んだ。日系三世を両親として持つローカルの学生が数多く履修していた。一人の学生が履修理由として、「見た目は日系人だけれども、中身はアメリカ人である。自分のルーツを知りたくてこの授業を履修することにした」と答えていたことが、今でも強く印象に残っている。

このような授業の開講や、あるいは花柳舞踊学校のような活動を続けることによって、若い世代からハワイの移民文化に対して強い関心を集めることができる。また、これらの活動が、次の世代へと受け継がれるきっかけに繋がると筆者は考える。

本稿ではネイティブ・ハワイアンの歴史とハワイ経済の発展、そして、ハワイにおける接触言語の形成過程とピジン語の発展を考察した。さらに、ピジン語と英語教育の関わりを考察した。その考察のなかで、ハワイの接触言語が、英語教育にどのような影響を与えるかを考察した。また今回の考察を通して、接触言語に対して深い理解を示すことは、英語教育の促進に繋がることが明らかになった。

## 注

- 1) ポール円福 著 『ハワイ報知100周年記念 ハワイ日系パイオニアズ-100の物語』 アメリカ合衆国：ハワイ報知社、2012年2月。

- 2) 連鎖劇とは映画と舞台を組み合わせた形式のものであり、無声映画時代には人気があったとされている。
- 3) 花柳三津秋の母親のみつえは、1895年にハワイ州ハワイ島西部に位置する、コナ出身である。みつえは9歳の頃から子役として舞台に立っていた。
- 4) 筆者はハワイの接触言語と日本語との関わりに関して、すでに考察を試みている。拙稿「ハワイの接触言語の形成過程と日本語・日本文化の影響」(『日本比較生活学会』 第26号、2019年)を参照されたい。そこでは、日系移民の話す日本語・日本文化がハワイの接触言語に影響を及ぼした経緯を述べた。
- 5) 筆者は日系3世の母と2世の祖父母にもつ日系人である。

## 参考文献

- 朝日祥之・原山浩介 (2005) 『アメリカ・ハワイ日系社会の歴史と言語文化』 東京：東京堂出版社
- Da Pidgin Coup (1999). *Pidgin and Education: A Position Paper*. *Educational Perspectives*, 41(1-2), 30-39.
- Sakoda, K. and Siegel, J. (2003). *Pidgin Grammar: An introduction to the creole language of Hawai'i*. Honolulu, HI: Bess Press.
- Siegel, J. (2005). *Literacy in pidgin and creole languages*. *Current issues in language planning*, 6(2), 143-163.
- 白井友季子 (2019) 『ハワイの接触言語の形成過程と日本語・日本文化の影響：ピジン語とレオール語を中心として』 日本比較生活文化学会, (26), 1-10.
- 白水繁彦 (2015) 『ハワイにおけるアイデンティティ表象：多文化社会の語り・踊り・祭り』 東京：お茶の水書房
- 松原好次 (2010) 『消滅の危機にあるハワイ語の復権をめざして：先住民族による言語と文化の再活性化運動』 東京：明石書店
- Romaine, S. (1994). *Hawai'i Creole English as a literary language*. *Language in Society*, 23(4), 527-554.
- Wigglesworth, G., & Billington, R. (2013). *Teaching creole-speaking children: Issues, concerns and resolutions for the classroom*. *Australian Review of Applied Linguistics*, 36(3), 234-249.
- 矢口祐人 (2002) 『ハワイの歴史と文化』 東京：中公新書
- 山本真鳥・山田亨 (2017) 『ハワイを知るための60章』 東京：明石書店